

# 追悼の辞

名誉会長（第二代会長）

## 八城東郷さんを偲んで

会長 加藤 導 男

当会の八城東郷名誉会長（第二代会長）は、昨年十二月三日、九十一歳の生涯を閉じられました。

お通夜には当時編集長を継がれた丹下重明相談役と奥様ともご親交のあった藤盛紹子理事とで列席させていただきました。

そのお顔は大変穏やかで、お棺の中には、奥様と喪主をされた故ご長男夫人の登喜枝さんのお心遣いで『創立三十五周年記念誌（壮志）』と、『歴史研究』最新号が納められていました。

このお通夜の際に、藤盛さんより、「ご長男が亡くなられた頃に、当会会報にその事を詠んだ俳句を寄稿されましたよ」と告げられたので、帰宅してから読み返したところ、平成十一年九月発行の『会

報四十五号』の俳壇に、ご長男を悼む俳句が四句掲載されています。その中の一句です。

子は逝けり

五月の闇の

明けぬ間に

当方は俳句が苦手なことから、普段から会報の俳壇を読むことはなく、このことに気づきませんでした。ただこれ以前、以後も八城さんの投句はありませんでした。前記の句を読み、私は感極まり絶句いたしました……。

ご長男は平成十一年、八年間闘病され意識のないまま、四十三歳の若さで他界されましたが、八城さんは寡黙な方で、その事は一切口にすることはありませんでした。ただ、平成十七年の歴史研究

会山梨大会にご夫婦で参加された三次会の和室で、八城さんはご長男の事を涙して語られたことを思い出します。

八城さんは当会が創立した二年後の昭和六十年に入会され、会報の編集長として平成六年より十三年間もの長期間努められました。

あとを継がれた丹下さんは「八城さんが編集長の頃は会報の原稿は全て手書きで編集・割付等をされ、さぞ苦勞されたに違いない」と述べられていました。

八城さんの研究テーマは、郷土に因むことが多く、『鶴見川のものふたち』『多摩川流域の古墳』『八郷の行方氏』や、中国史の『アヘン戦争』『中国史における宦官』等の研究発表や会報に投稿されました。

平成二十年の暮、当時初代会長の町頼勝さんより、八城さん（当時副会長）と当方（同事務局局長）に呼び出しがあり、逗子のご自宅にご一緒しました。

大町さんから「体調と年齢等の問題もあり、八城さんに会長をお願いしたい」と話されたが、八城さんより「有難いことですが、お引き受けるについて条件がありま

す。加藤さんを副会長として頂けるならお引き受けいたします」と言われ、大町さんは了解され、毛筆で「推薦状」を認（した）た。その写しを役員会で配布いたしました。

平成二十一年、八城さんは会長に就任され、歴史研究会「首都圏大会」では、実行委員長を努められた（当方も大会事務局長として参画させていただきました）。

まさに文字通り謹厳実直な方で言われた事は必ずやり通す方でした。十一年前の創立二十五周年記念行事で講演会の他に何をやるかと役員会で協議した際に、当方の関係で落語会を提案したところ、八城さん（当時副会長）は、「落語は歴史には関係ない」と反対されたが、当時の大町会長から「加藤君の意見通り、落語も面白いかも知れない」と賛成され、奥富敬之先生の講演の前に第一部として落語会を開催した。当日は満員盛況で、催しが終わった際に、舞台裏で八城さんから当方に、深々と頭を下げられ、「本当に良かった。加藤さんに謝ります」と言われ、大変恐縮した記憶があります。

十八歳ほど目上の方から、あ



平成19年10月  
横濱歴史研究会創立25周年記念

なに丁重に謝罪される様な方にお会いしたこともなく、本当に人格者であったことを感じた次第です。

一緒に横浜歴史研究会にいられたことを誇りに思っています。

あちらに行かれましたら、亡くなられたご長男と久しぶりにお話されていることでしょう。

どうか、愛されたご家族の幸せをお祈りし、心血を注いでいた我が会をお見守り下さい。

心より安らかなる

ご冥福をお祈りいたします。

合掌

平成三十年一月十日

## 会員研究

# 美濃の有力武士団土岐一族の興亡録

竹村 紘一

### 土岐氏とは

鎌倉時代から江戸時代にかけて美濃を本貫とした武門の大族で本姓は源氏。清和天皇を祖とする清和源氏の一流である摂津源氏の流れを汲む美濃源氏の嫡流として美濃国を中心に栄えた。室町時代から戦国時代にかけて侍所として五職家の一角を占めるとともに美濃国守護を務め、最盛期には美濃、尾張、伊勢の三ヶ国の守護大名となった。戦国時代に斎藤氏・織田氏・北畠氏などの対立する諸大名との勢力争いに敗れて没落し、戦国大名としては生き残れなかったが、一族に優秀な人物が多く、戦国武将として各地の大名に仕えて頭角を現した。明智光秀・浅野長政・遠山友政・仙石秀久・土岐定政（菅沼藤蔵）等でも多い。江戸時代末期まで大名として存続したのは浅野、遠山、土岐定政家の三家である。家紋は桔梗紋で、

土岐光衡が戦で桔梗花を兜に挟んで戦ったのを記念して、家紋としたのが始まりであるとされている。「土岐桔梗」と呼ばれている。土岐一族である明智光秀は水色の桔梗紋を使用していたことで有名である。

### 出自

源頼光とその子の頼国が美濃守となり、頼国の曾孫・光信の時に美濃国土岐郡土岐郷に居住して、はじめて土岐氏を名乗った。頼国の子の国房以降、史料上では美濃での活動が見られている。土岐氏の祖については系図類により国房、光国、光信、光衡の諸説あって明確ではないが、光衡を祖とする説が有力である。土岐氏の分流は120家以上になるが、中世に分家した家系を遡ると殆どが光衡へ繋がるので、光衡が土岐氏の祖と言える。

『江濃記』に「土岐殿と申すは、

頼光の後胤也。清和天皇の御末、保元の頃、伊賀守光基と申す人大功有り、美濃国守護を給わり、その子・伯耆守光長、法住寺合戦に討ち死し、その弟・光衡、また美濃に居住し、是を神戸判官と云ふ。その子・光行は、信濃守に任じ、関東へ下向して將軍に奉仕。その後、美濃守光貞、北条家の婿と成りて、子孫繁盛也」とみえる。

鎌倉末期、倒幕を企図する後醍醐天皇の側近日野資朝は、武士の中に同志を求めて関東に下り、土岐一族と接触を持ち、土岐頼兼、その従兄弟・頼員（舟木頼春とも）、同族の多治見国長らの参加を得た。しかし、頼員は、妻との別れを惜しんで、ある夜の寝覚めの語らいに、不用意にも計画を漏らしてしまった。頼員の妻の父は六波羅の奉行斎藤利行だったため、心配した妻は夫の為を思い、父に一部始終を打ち明けたのであった。

密告を受けた六波羅探題により、頼兼や国長の京の宿舎が襲われ、頼兼・国長は、まさか一族の頼員の口から計画が洩れたとも知らず、探題軍に急襲されて討死した。ここに後醍醐天皇の倒幕計画は失敗に終わった。首謀者の日野